

上郷町発掘調査報告書

姫宮遺跡

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

上郷町発掘調査報告書

姫宮遺跡

長野県下伊那郡上郷町教育委員会

序 文

上郷町には、各所に数多く有力な埋蔵文化財包蔵地がありますが、今まで町当局として発掘調査の機会がありませんでした。

昭和53年頃から姫宮地籍に老人福祉センター建設設計画が進んでまいりましたが、この予定地域内は、登録埋蔵文化財包蔵地「姫宮遺跡」で、遺物出土の多い所でありますのでその取扱いについて府内で検討を進め、県教育委員会文化課担当主事の指導を得て、発掘調査に踏み切ることにしました。

姫宮遺跡は元来遺物出土の多い所でありますので、どのように調査を進めてよいのか苦慮していました。幸い今村善興氏の承諾と、町出身の竹内稔氏ほか信州大学考古学研究会の方々等有為な方々を得、町の老人クラブの協力で発掘調査が遂行できましたことは喜びに耐えません。

調査の成果は報告書のように予想された遺構の発見は少なくありませんが、縄文時代早・前期・後期の土器片の出土は多く、町内では発見例の少ないこの期の遺物が多く収集され、資料的価値は非常に高いと伺っています。

調査報告書刊行に当って、この調査の実施に深いご理解とご指導をいただいた町当局関係各位、県教育委員会文化課、ご多忙の中を現地調査や報告書作成を遂行してくださった今村団長はじめ調査員各位、発掘作業に献身的にご協力くださった老人クラブの方々に対し深甚の謝意を表すると共に、この調査を契機として、上郷町の文化財保護行政を更に積極的に推進したいと考えております。

昭和56年2月1日

長野県下伊那郡上郷町教育委員会教育長

関 島 昌 平

例　　言

1. 本報告書は発掘調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示・記述することに努めた。
2. 本書の資料作成あたり、遺構図の作成、整図は、宮城・竹内・田中が担当した。
3. 土器・石器の実測・整図はそれぞれ竹内・宮城が担当した。
4. 土器の拓影は直井が中心となって、調査員全員が当った。
5. 遺構写真は竹内が撮影し、遺物写真は竹内・宮城が担当した。
6. 土器実測図は、縄文土器については断面を白ぬきとし、須恵器、灰釉陶器については断面を黒くぬりつぶした。
7. 石器については原則として平面、側面、立断面によって図化し、土擦れ、使用痕が観察できる部位・範囲は横方向の平行線と矢印によって示した。
8. 遺構・遺物の説明は、各調査員の諸記録に基づき第Ⅰ、Ⅱ章は今村、第Ⅲ章は竹内・直井・宮城・田中が分担執筆し、文末に責を記してある。なお編集は今村が担当した。
9. 遺物、原図等関係資料は、上郷町教育委員会で一括保管している。

目 次

序 文

例 言

I 調査の経過.....	1
1. 調査経過.....	1
2. 調査団組織.....	1
II 周辺の環境.....	3
III 調査の結果.....	6
1. 遺 構.....	6
(1) 第1号竪穴址.....	6
(2) 溝状遺構.....	6
(3) 集石炉.....	6
2. 遺 物.....	7
(1) 土 器.....	7
i) 早期・前期に比定されるもの.....	7
ii) 中期・後期に比定されるもの.....	7
iii) 晩期に比定されるもの.....	8
iv) 須恵器・灰釉陶器.....	8
(2) 石 器.....	8
M 調査のまとめ.....	12

(図版目次)

第1図 上郷町上段地域遺跡分布図.....	16
第2図 姫宮遺跡調査地区内遺構分布図.....	17
第3図 姫宮遺跡東西方向セクション図.....	18
第4図 第1号竪穴址実測図.....	19
第5図 溝状遺構実測図.....	20
第6図 集石炉実測図(1)〔検出面断面〕.....	21
第7図 集石炉実測図(2)〔底面〕.....	22
第8図 姫宮遺跡出土土器実測図.....	22
第9図 姫宮遺跡出土土器拓影図(1).....	23
第10図 姫宮遺跡出土土器拓影図(2).....	24

第11図 姫宮遺跡出土土器拓影図(3).....	25
第12図 姫宮遺跡出土石器実測図(1).....	26
第13図 姫宮遺跡出土石器実測図(2).....	27
第14図 姫宮遺跡出土石器実測図(3).....	28
第15図 繩文時代前期・後期土器及び石器出土地点図.....	29~30

(写真図版目次)

第1図版 姫宮遺跡調査地全景、第1号竪穴址、溝状遺構.....	31
第2図版 集石炉断面・底面及び土器出土状況.....	32
第3図版 姫宮遺跡調査地遠景、東西セクション、調査状況.....	33
第4図版 姫宮遺跡出土土器(1).....	34
第5図版 姫宮遺跡出土土器(2).....	35
第6図版 姫宮遺跡出土土器(3).....	36
第7図版 姫宮遺跡出土石器(1).....	37
第8図版 姫宮遺跡出土石器(2).....	38

I 調査の経過

1. 調査経過

姫宮遺跡は上郷町上黒田、通称姫宮地籍にある。本高森山(1890)の南側一山嶺(1664)を源とする野底川の中流右岸添いに形成された扇状地である。山林經營で知られた野底山の最下部地域にあたり、いわば山の出口に位置している。上に八王寺神社、近くに姫宮があり、この付近一帯は緩傾斜の小扇状地がいくつか並び、大正時代から遺物出土が知られた所である。とくに姫宮地籍の扇状地はやや広めで、森林組合の苗圃として活用され、縄文時代草創期から早期・前期の土器片や、石製模造品、灰釉陶器片が表採され、上流の八王寺・堂ヶ入遺跡と共に、上郷町の中では上流地域の遺跡として注目されていた。姫宮センターの裏側に老人福祉センターの建設計画の進んだ昭和54年に、上郷町教委から今村に相談があり、県教委文化課の現地協議の結果、上郷町教委主体の発掘調査が計画された。昭和55年になって、今村、竹内に調査の依頼があり、信州大学考古学研究会の協力を得て、発掘調査開始の運びとなった。

5月18日姫宮遺跡調査会が結成され、調査団組織と共に発掘調査が始った。発掘調査は5月21日から6月1日にかけて実施された。土層と遺物包含、遺構有無確認のために、重機により、東西、南北交叉のトレントラバ削除作業を進めた。縄文前・後期の土器片の出土が多く、とくに後期の土器片の集中区を中心に調査範囲を拡大していった。遺構の検出は報告のように竪穴式、溝状遺構、集石炉に止ったが、調査区の中央部一帯に後期の土器・石器の散布が集中し、ピット、平状石、焼土の発見もあったので、土器片・石器の出土地点の記録を精細に残すこととした。その代表的な遺物の出土地点を表わしたもののが第15図で、集中地域が伺える。全域に亘って調査を進めながら、生活址の発見は少なく、住居址等の遺構は上方地域にあると推定されよう。(今村)

2. 調査団組織

(1) 調査団

團長 今村 善興 (日本考古学協会員)

調査主任 竹内 稔 (長野県考古学々員)

調査員 直井 雅尚 小林 秀行 石上 周藏 米庭 泰 宮坂 享

宮城 孝之 田中正治郎 辻山 秀一 大竹 庄司 上野山恭和

奥山 元彦 小島 秀典 平尾 佳代 船坂みさと

(信州大学考古学研究会)

(2) 調査委員会と協力機関

顧問 山田 隆士
委員長 下井 稔穂
副委員長 宮下 忠義
委員 岡田 三郎 浜島 順造 伊原 武司 篠田 茂三 加山 三男
岡田 道人 宮崎 政夫 小木曾 英寿 牧野 光弥 下平 優訓
麦島 正吉 渡辺 直昭
上郷町老人クラブ連合会会長 下井政男 上郷町役場総務課課長 関島昌平
上郷町役場民生課課長 今村賛一 上郷町役場林業課課長 菅沼富雄

(3) 調査委員会事務局

上郷町教育委員会事務局長 関島安雄 上郷町教育委員会総務係長 池田丈夫
" 社会教育係長 篠田公平 " 社会教育係 角池紀子
" 公民館主事 萱間恒弘 " 公民館主事 大藏 豊

(4) 作業員

鈴木 鉄一 岩崎 貞雄 竹内 志げ 篠田兵次郎 北原 きぬ 平栗 光司
大島 一郎 北原 はる 池口 正美 桜井 武男 北原亀太郎 幸野 栄一
宮田 菊 折竹 伝 小池 正紀 田中 勇 安田 鷹雄 伊藤七五郎
羽生 初子 壬生 タセ 木下 千秋 田中 武夫 杉本 増雄 宮脇 豊司
吉川 康夫 吉川 康 吉川 千秋 岡田 寛一

II 周辺の環境

上郷町の中央自動車道は、柏原・米の原段丘崖下を走り抜けている。従って中央自動車道を境にして地形は大きく二分されている。すなわち、中央自動車道より上方は、飯田市上飯田と境する柏原段丘、飯田市座光寺を境する米の原扇状地と、その間に八幡原扇状地と野底川渓谷・野底山山地帯であり、下方は、山麓に続く上黒田・黒田の大扇状地面と、見晴山（原の城）、高松原で代表される高位段丘に続き、その下方には飯沼面で代表される広大な中位段丘となっている。これらの扇状地や段丘面の成因にはいろいろな要素があろうけれど、野底川の影響によるもののが大であろう。別の言い方をすれば、上郷町の生活地域の大部分は、野底川の働きによって形成された土地という事もできよう。

野底川は、山中においては上郷町の中央部を、山地帯を離れた所からは、旧飯田市の境を流れている。流路を詳しく説明すると、高森町奥の本高森山の少し南、一山嶺付近を源として、断層線に添って南流し、越田沢川・畠の沢川が合流するあたりから流路を東に転じて東南流し、大島沢、風越沢、二の沢、板山川、一の沢、堂ヶ入沢（遺跡図上方部分）等多くの支流を集めながら姫宮地蔵以下流で山地帯を離れ、旧飯田市の境を流れて、別府隠田地蔵で飯田松川に合流している。北東の座光寺地蔵と境する土曾川もあるが、奥深い所から流れ出る野底川は、時として荒川になることもあったが、水量は豊かで灌漑用水路は左右岸合わせて15以上の大きさを数えて、古くから里人の生活に深く結びついていたことを物語っている。この野底川の上流左右岸に続く野底山は、古来から上郷地区旧5カ村の入会山として経営され、幾多の山論が繰返されたことで知られた所である。やく1500町歩以上に及ぶ近代的山林施業案編成のために、50年間以上に及ぶ入会権解消の諸交渉を経た後、何期にも亘る施業案実施によって、広大な山林經營が順調に進んでいる所として知られている。昭和40年頃には町の財政源の3分の1をこの山林資源で支えて来たとも言われている。現在では過去の残存用材も伐採し尽されて、新たな山林經營計画が樹立され、育林經營の時代とも言われている。森林の基盤作りに主力が注がれ、輪伐方式による安定經營に移行しつつあると聞いている。これらの經營計画の歴史も浅くなく、その一環として大正末期に造成されたのが、「姫宮」・「堂ヶ入」苗圃場である。この苗圃經營のために開墾造成された折に遺物が発見されたもので、山地帯中の遺跡所在確認の契機となっている。

姫宮地蔵の上方に八王寺神社が祀られている。この神社の由来は定かでないが、元禄年間山論公事の折、江戸行の途中で宿泊した八王子に「山の神」があったことから、その御加護を願うために、御分靈を勧請して祀ったものと言われている。祭神は「大山祇神」で、旧5カ村（上黒田村、下黒田村、別府村、南条村、飯沼村）全体で祀ったもので、旧5カ村の入会山野底山を護る山の神としてはふさわしい神社である。八王寺神社の下方500m、山林事務所のやや下手、林道の右側に小社があり、「姫宮」と呼ばれている。この社は旧上黒田村のもので、祭神は明確ではない。

いが「姫宮様」といっていることから、八王寺神社に対する姫宮であるとするならば、鹿屋野比亮命のことと、江戸時代中頃から野底山にふさわしい、山の神、野の神、草の神が祀られているわけである。この姫宮には岩見重太郎拂々退治の伝説が残されている。この伝説の由来を知る由もないが、拂々の逃れた最後の場所は風越山の奥の院であった。このあたりに風越山へ通ずる道があること、姫宮遺跡から石製模造品の出土があったことから、古くから山岳信仰の姿があったのかも知れない。

上郷町全体では埋文包蔵地はやく50か所、古墳33基、城跡3の多きにのぼっているが、中央自動車道周辺から、野底川上流域の埋文包蔵地は第1図の通りである。この中で本格的な発掘調査が行われたのは、赤坂遺跡⁽³⁾と今回の姫宮遺跡⁽³⁾だけで、他は表面分布調査と耕作中の発見例によるだけで定かとは言い難い。然し乍ら昭和46年度に飯田高校考古学研究会の克明な表面分布調査によるもので、信頼度の高いものである。野底川上流域の室ヶ入・八王寺・姫宮遺跡(1~3)について見ると、縄文時代草創・早期から中期土器片の発見地として古くから知られており、八王寺遺跡では、縄文時代前・後期の土器と灰釉陶器が、姫宮遺跡では弥生後期・平安灰釉・須恵器、石製模造品まで拾集され、単純遺跡でないことが年々明らかになって来た。今回の発掘調査によって、縄文時代前・後期の土器片多量のほか、早期押型文土器、中期土器片、平安時代の土師・須恵・灰釉陶器片の出土もあって、この周辺は今後に期待される地域と考えられよう。更に奥地でもときどき土器片を拾うとの事で、今後新遺跡の発見も期待され、弥生時代後期や平安時代の高地集落の発見の可能性もあるう。

野底川が山地帯を出るあたりから遺跡の分布は濃密となり、柏原、上黒田の遺跡群を形成している。日影林⁽⁴⁾では道路工事中に勝坂式土器を伴う住居址が発見されたり、八幡原⁽⁸⁾は古くから縄文時代中・後期の遺物出土土地と知られるばかりではなく、灰釉瓶、楕、壺の完形品出土の例がある。柏原A⁽⁵⁾では弥生時代後期の甕が、赤坂⁽³⁾では弥生後期の壺・甕の頸部と共に、炉址の発見も報告されている。見城垣外⁽⁶⁾では縄文中期加曾利E式の深鉢が出土している。その他に遺物出土の多い所では、柏原C⁽⁷⁾、かじ垣外⁽⁸⁾、社宮寺原⁽⁹⁾、大明神原⁽¹⁰⁾等があげられる。一覧表で見ると、縄文早・前期は野底川上流域に多く、中期はほぼ全城、後期も各所で発見されていることがわかる。弥生時代のものは中期の一部を除いて、後期の土器片の発見が非常に多い。これは飯伊地方共通の特長で、高槻段丘上の弥生集落の存在を物語っていよう。平安期の遺物が各所に出土していることは、この地の特長の一つであろう。詳細調査をしてみたいところであるが、近年どの地籍も新興住宅の進出が多く、未調査のまま破壊される遺跡の多いことは口惜しい限りである。姫宮遺跡⁽³⁾の例のように、発掘調査をすれば、各期の遺物発見が多く、この表が充実していくわけである。

(今村)

第1表 上郷町上段の遺跡

番号	遺跡名	先土器	縄文				弥生		古墳	奈良 平安	中世	備考
			草	早	前	中	後	晚				
1	堂ヶ入			○	○	○						
2	八王寺			○	○		○			○		
3	姫宮		○	○	○	○	○	○	○	○		
4	日影林			○	○							道路工事中住居址発見
5	柏原A				○				○	○		
6	柏原B				○							
7	柏原C				○							
8	八幡原				○	○			○	○	○	(含新屋敷)
9	米の原			○	○	○			○			(含座光寺)
10	丸山				○				○			(含砂原)
11	かじ垣外				○			○	○	○	○	(含七郎垣外)
12	五本木				○							(北の原)
13	赤坂				○			○	○	○	○	(含十王堂 弥生住居址あり)
14	楓畠				○			○				
15	社宮司原			○		○		○	○			(含宮の上)
16	畠中				○			○				
17	町張				○			○	○	○		
18	池の尻				○			○	○			(間根垣外)
19	今村							○	○			
20	宮下							○				
21	中曾根				○				○			(久保)
22	原の城				○			○	○	○	○	
23	大明神原				○	○	○		○	○	○	
24	見城垣外			○	○	○		○	○	○		(含障子垣外)

III 調査の結果

1. 遺構

(1) 第1号堅穴址(第4図、第1図版)

調査地北側際に発見された落ち込みをこのように呼ぶ。北西辺は一部くずれるものの直線的な輪郭を示すが、南東側の半分は傾斜地ゆえの消滅か、不明である。一辺6m近くの隅丸を呈する造構と推定される。第II層より掘り込まれている。壁は直に近いが内弯気味にやや傾き、床面とおぼしき面は軟弱で明確ではない。また壁外から床面にかけて長さ10~40cmの角礫が点在している。壁にも落ち込みに沿ってずり落ちる状態に角礫がかかっている。

床面に生活の痕跡を止める資料は少なく、石器は数点見出されたが、一括状況を示す土器は発見されなかった。よって時期・性格も不明といわざるを得ない。

(2) 溝状遺構(第5図、第1図版)

調査地西端から中央部にかけてほぼ直線的に伸びる。確認できる範囲では長さ約12mに及ぶ溝状の遺構である。花崗岩が風化してできた幅20~60cm、厚さ10~30cmの白色砂の堆積層(図中の破線内)が認められ、その上位に所々、拳大から人頭大の角礫が集中的に分布している。

西側は勾配を持つが、中央部では等高線にはほぼ沿っており、幅が狭いことからも自然の營力によるものとは考えられない。調査地中央近くは遺物包含層確認トレンチに削られ一部不明であるが、調査地外西方の沢より引水して何らかに利用し、調査地中央部付近で放水した人工的な溝址と考えられる。集石中には遺物も散見され、打製石斧(第12図1)、灰釉陶器片(第8図5)の他、用途不明の鉄片が出土している。比較的新しい時期の所産であろう。

(3) 集石炉(第6・7図、第2図版)

調査地南際に1基発見された。第I層下から掘り込まれており、直径1.8mの円形を呈する。集石に使用されている礫は全て花崗岩で、上半部のものは小兒頭大、下半部は拳大のものが多く、密に詰っていた。礫の内には火を受けたものが数点あったが、多くは顯著でない。断面はすり鉢状を呈し、深さは65cmを測る。下半部より礫に混じって炭化物が集中して発見された。比較的大きな炭化材も残り、明瞭にクリと推定される。礫と炭化材の間は黒色土が充満していた。床面には長さ20~40cmの扁平な石が敷かれた状態で検出されたが、1個は熱を受けて赤変していた。

出土遺物は土器片が2点見出されたが、1点は精円押型文(第9図1)であった。集石の上半部覆土内より発見された。

(竹内)

2. 遺物

(1) 土器

i) 早期・前期に比定されるもの (第9図1~31)

1は楕円押型文をもった土器片で、集石炉より出土したものである。この他、楕円押型文をもつ土器片は2片得られているが、いずれも小破片で、図示するに至らなかった。2は山形押型文を施される土器片である。1・2とも胎土に細かい砂と雲母を含んでいる。3はいわゆる「オセ・ンベ土器」で、図示した他に10数点得られている。胎土に少量の繊維を含み、焼成は良好で堅緻である。4は表裏に条痕が施され、胎土には繊維と小雲母片を多く含んでいる。図示した他に2片得られた。早期後葉に比定される。5は羽状縄文が施されている。裏面は平滑に調整され、胎土には長石の砂を含む。前期後葉の所産と考えられる。6から9は、表面に縄文が施されるとともに裏面にも部分的に縄文が施されるものである。このうち7は口唇部に凹凸をつくり、8・9は波状口縁になるものと思われる。いずれも前期後葉のものであろう。10から21は器面全体に縄文が施され、粘土紐の貼り付けが多用される土器群である。11は口縁部に指頭圧痕を残し裏面に横走する稜を有する。12は内面がミガキ様に調整された焼成の良好な土器である。19は波状の口縁をもち、眼鏡状に連続して粘土紐を貼りつけてその上から縄文を施したと思われる土器片で、器面全体に炭化物が付着している。いずれも前期後葉に比定されよう。22から28は、貼り付けた粘土紐に半截竹管を用いた押し引きで刻みをいれるもの、押し引き竹管により文様を構成するもの等の一群である。22・23の如く下地に縄文をもつものもある。器形は深鉢形になると思われ、26は波状口縁をもつ。胎土は概して精選されている。時期的には前期後葉に位置すると思われる。29は深く鋭い沈線によってレンズ状の文様が描かれており、胎土に細かい砂を多量に含む。前期後葉のものと考えられる。30は半截竹管を用いた平行沈線で囲まれた内部に縄文を充填しているもので、深鉢である。31はやはり半截竹管を用いて集合条線が刻み込まれて、底部の角は上にむかってややしまっていく鋭角状を呈している。焼成良好で堅緻である。30・31ともに前期後葉の所産と考えられる。

ii) 中期・後期に比定されるもの (第10図32~54、第11図55~63、72・73、第8図1)

32は、いわゆる平出Ⅲ類A式とよばれている土器で、本遺跡からの出土は、この1片のみである。胸部のくびれ部にあたると推定され、指頭圧痕列及び沈線による横線とこれを切る孤線を有する。33から35は、内部に杉葉状の沈線を充填した縦の区画をもつ深鉢形の土器で、垂下する撇手文や口縁部の横位の区画帯を伴う。いずれも焼成は良好で、胎土に多量の砂・雲母を含む。中期後葉から末葉の所産と思われる。36は深鉢形土器の胸部下半で、縦方向に引いた沈線の間に、2つの結節をもつ原体によってつけられたと思われる結節縄文を配する。中期後葉に比定されると考える。37から41は同一個体と思われる一群で、太い沈線を用いて、口縁部には横位の長楕円形の区画を配し、胸部には縦の長楕円形・波状の懸垂文等を描く。器面はミガキ様に調整され、

胎土には長石砂が含まれる。中期末葉のものと思われる。42・43は深鉢形土器の胴部である。幅1.5～3cmで縦方向の帯状に繩文を施したものを、1～2cmおきに配列している。粗製で径3～6mmの長石の砂を多く含み、また表面には炭化物の付着が著しい。中期末葉の土器と思われる。44～46は同一個体と思われる深鉢形土器の胴部である。2本の縦の沈線間に、1本の沈線をはさんで相対する2本の波状の沈線を縦方向に配している。後期初頭の所産と思われるが類例が多く、不明な点が多い。47は深鉢形土器の口縁部と思われる。口縁の無文帯とその下部の繩文帯との間に凸帯を設けている。中期終末期のものであろう。48～52は、沈線により自由な曲線、橢円形を描くもので、48を除き沈線は概して浅く、51・52は施文具の先が凹凸をもっている。器形は胴部下半が内弯気味に外開し、やがてわずかに外反しながら口縁に至る形状を呈すと思われる。胎土に砂を多く含むが、焼成は良好である。後期初頭の土器であろう。53も細い沈線によって壺形の自由な長楕円を描いているが、器形はやや内傾して口縁に至っている。やはり後期初頭のものと思われる。54～58は磨消繩文技法が用いられている土器である。54を除いて、横の文様帯をもつが57・58は繩文が細かい。57の沈線は断面が角ばっており、また58の文様帯には赤色顔料が残っている。後期中葉以降にその編年の位置を与えられると考える。59～63は、薄手の精製土器で、口縁部外面に2条、内面に1条の沈線が横走している。内外面ともミガキ様に調整され、焼成も良好である。やはり、後期中葉以降にその時期が求められよう。72・73は底部で、それぞれ木の葉底、網代底を明瞭に残している。第8図の1は、ヒメリを加えた極太い粘土紐を外縁部にはりつけた橋状把手である。深鉢様の体部につくものと思われる。

iii) 晩期に比定されるもの (第11図64～71)

64～71まで、条痕文をもつ土器を一括した。口縁部及び胴部片であるが、器形は壺或いは壺形を呈すと思われる。65・69は口唇部に刻みを有し、70も口唇部に隆線を配し、指圧痕による凹凸を有する。晩期末葉の所産と思われるが、65・69はこの範疇に属さない可能性もある。

iv) 須恵器・灰釉陶器 (第8図2～5)

2・3は須恵器の坏である。いづれもロクロ成形痕を明瞭に残し、底部に2は回転ヘラ切りはないし、3は回転糸切りの痕が観察できる。4・5は灰釉陶器で、碗になるものと思われる。釉は全面にかかっているが、粒状に凝着しており、滑らかな器面ではない。時期差はあるが、いづれも平安時代のものと考えられる。

(直井・田中)

(2) 石 器

本遺跡の石器の出土は総数52点である。その内容は、打製石斧30点、石鎌9点、スクレーパー6点、磨石4点、石匙1点、凹石1点、石鏟1点である。出土は散発的で層位的にも特徴は見出せなかった。石器の材質をみると、52点中25点が砂岩でおよそ半数を占める。特に打製石斧の材質においては、頁岩1点をのぞけば29点中19点が砂岩、10点が緑色片岩でこの緑色片岩は打製石斧だけに使用されており、ある程度の材質の選択が行われたものと思われる。緑色片岩は砂岩と同じく転石で天竜川の河原に多く見られ採取しやすい岩石である。

以下順次石器の概略を述べるが、石器の材質・重量等詳細については「出土石器一覧表」を参照していただきたい。尚、石器の材質鑑定は信州大学大学院・中村由克氏にお願いした。

打鑿石斧 (第12・13図1~28)

1は溝状造構の堆積層の上部から出土した挽形の完形石斧である。大形で3分の1ほど自然面を残す。刃部は使用により斜刃を呈し摩耗痕が認められる。基部にも着柄によると思われる摩耗痕が認められる。2は自然面が多く残り、外縁の剥離調整の仕方は粗雑である。刃部先端は鈍く摩耗痕が認められる。3は薄く、剥離稜線がはっきりしていない。基部に摩耗痕が認められる。4は基部をわずかに欠損した短冊形である。剥離稜線はほとんどわからない。5は刃部が欠損しており扁平である。剥離調整は粗く行われている。6は自然面を非常に多く残し、刃部と左縁辺はわずかに数回の剥離が行われているにすぎない。基部側縁にわずかに摩耗が認められる。7は挽形の完形石斧である。基部側縁に摩耗が認められる。8は基部をわずかに欠損した挽形である。中央に自然面を残す。9は刃部を欠いた大形石斧である。厚く側縁を粗く剥離調整しているにすぎない。10は挽形の完形石斧である。3分の1ほど自然面を残し、刃部先端に摩耗痕が認められる。11は短冊形の完形石斧である。刃部に摩耗痕が認められ、先端は鈍い。基部にも摩耗痕が認められる。12は挽形の完形石斧である。自然面を多く残している。13は完形で中央にわずかに摩耗が認められる。14は刃部を欠損している。剥離調整は細かくなされている。15は基部を欠損した短冊形である。厚味があり中央に自然面がわずかに残る。16は基部と刃部を欠損している。縁辺の剥離調整は粗い。17は刃部を欠損した挽形である。剥離稜線は不明確で、剥離回数も少ない。18は基部を欠損している。自然面を多く残し刃部に摩耗痕が認められる。19は深い抉りをもち、刃部を欠損している。自然面を残し抉り部に摩耗が認められる。20は刃部を欠損している。右縁辺に自然面を残す。21は基部の残欠で、22・23・24・25は刃部の残欠である。いずれも刃部には摩耗痕を認めることができる。26は基部の残欠で剥離稜線は不明確である。27は中央部残欠である。28は深い抉りをもち自然面を多く残す。刃部は滑れており、かなり使用されたものと思われる。以上の他に、図に入れなかったが2点基部の残欠がある。

スクリーパー (第13図29、第14図30・32・39~41)

29は局部的に細かい剥離調整を行って刃部を作っており、右側部分は欠損であるか不明である。30は第一次剥離によって偶然にできた形にはほとんど調整を加えることなく石器として使用している。細かい剥離がみられるが使用による刃毀れであると思われる。32は自然面をそのまま残し、第一次剥離によって偶然にできた形に抉りを入れている。39は局部的に剥離調整を行っているのみ他の部分には一切加工を加えていない。40・41はよく似た形態でともに刃部は厚く剥離調整もわずかに行われているにすぎない。

石匙 (第14図31)

31は3回の剥離によっておおよその形ができるがっており、つまみを作るための剥離調整と刃部には特に細かい剥離調整を行っている。

磨石 (第14図33~35・37)

33は5つの研磨面をもち、どの面も非常によく研磨され光沢がある。一部に新しい欠損が認められる。34は表裏ともに非常によく研磨されており、2カ所に新しい欠損が認められる。35・37はともに花崗岩で表面が風化しているが研磨された痕跡を残しており、35は表裏両面、37は1面のみ研磨されている。

四 石（第14図36）

36は欠損品であるが表裏に浅い凹孔を有し、表裏両面と側縁の全面が研磨されている。一部側縁に敲打痕が認められる。

石 錐（第14図38）

38は扁平な楕円形を呈する鍼を用い、長軸の両端にわずかの打ち欠きを加えている。

石 鑿（第14図42～50）

42・43は2等辺3角形を呈し基部にわずかに抉りを入れている。44はほぼ2等辺3角形を呈し基部に深い抉りを入れている。45は製作途中のもので両面とも片側に剥離調整が行われている。46・47はともに有柄で細かい剥離調整が行われている。48は脚部を欠損している。剥離稜線が摩耗しており、製作時に多少の研磨を加えたものと思われる。49は大形で抉りも深い。50は先端部を欠損しており剥離調整は粗く抉りも浅い。

（宮城）

第2表 姫宮遺跡出土石器一覧表

(単位cm・g)

図番号	No	造形名	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
第 12 回	1	溝状遺構	打製石斧	18.2	7.2	2.0	516.0	緑色片岩	B-15
	2	1号竪穴址	"	13.8	6.0	2.1	217.0	砂岩	E-21
	3	遺構外	"	10.9	4.4	1.2	87.0	緑色片岩	E-12
	4	"	"	10.3	3.3	1.1	67.5	"	G-15
	5	"	"	9.0	5.4	1.4	86.5	砂岩	B-18
	6	"	"	12.5	5.1	1.6	127.0	"	G-15
	7	"	"	9.4	4.1	1.3	69.0	緑色片岩	
	8	"	"	9.6	5.6	1.6	120.0	砂岩	G-14
	9	"	"	9.6	9.7	2.6	252.0	"	J-11
	10	"	"	12.5	6.1	2.2	195.2	"	F-15
	11	"	"	10.7	4.2	1.9	121.0	緑色片岩	F-16
	12	"	"	9.0	4.8	1.3	76.0	砂岩	B-19
	13	"	"	8.6	4.6	1.7	86.5	"	Aトレンチ
第 13 回	14	"	"	9.5	5.3	2.4	156.0	"	F-16
	15	"	"	8.6	4.4	1.9	113.0	緑色片岩	C-19
	16	"	"	10.8	5.9	2.0	85.0	砂岩	
	17	"	"	9.5	4.5	1.8	79.0	緑色片岩	Bトレンチ
	18	"	"	8.5	4.8	2.0	99.0	砂岩	
	19	"	"	7.9	4.4	1.6	61.0	"	
	20	1号竪穴址	"	7.7	4.3	1.8	99.5	緑色片岩	
	21	遺構外	"	7.4	5.9	1.9	130.5	砂岩	G-12
	22	"	"	6.1	4.4	1.3	44.0	"	Bトレンチ
	23	"	"	6.1	5.3	1.3	51.5	"	C-15
	24	1号竪穴址	"	6.6	4.4	1.2	46.5	"	
	25	遺構外	"	4.4	5.6	1.6	48.0	"	E-12
	26	"	"	6.1	3.7	1.5	42.5	"	Aトレンチ
第 14 回	27	"	"	5.6	4.3	1.3	45.0	緑色片岩	C-14
	28	"	"	7.2	3.6	1.8	76.0	頁岩	G-15
	29	"	スクレーバー	5.9	3.0	1.7	22.0	砂岩	
	30	"	"	12.3	6.7	1.2	110.0	ホルンフェルス	B-15
	31	"	石匙	4.3	7.4	0.6	19.0	頁岩	Z-15
	32	"	スクレーバー	8.4	5.0	1.1	42.5	砂岩	E-13
	33	"	磨石	15.5	8.4	5.8	1166.0	"	H-8
	34	"	"	10.0	9.9	3.3	458.5	"	表採
	35	"	"	9.9	9.0	4.4	589.0	花崗岩	Aトレンチ
	36	1号竪穴址	凹石	8.3	6.5	3.7	319.0	砂岩	D-21
	37	遺構外	磨石	10.4	8.6	4.2	525.0	花崗岩	F-14
	38	1号竪穴址	石錐	5.0	3.8	1.1	30.0	砂岩	
	39	遺構外	スクレーバー	3.1	3.2	1.2	6.0	流紋岩	F-15
	40	"	"	3.5	3.3	0.9	13.0	チャート	
	41	"	"	2.5	2.5	0.9	5.5	"	B-19
	42	"	石鑿	1.4	1.2	0.2	0.4	黒曜石	E-15
	43	"	"	1.7	1.4	0.4	0.7	チャート	F-16
	44	1号竪穴址	"	1.1	1.7	0.4	0.6	黒曜石	
	45	遺構外	"	2.0	1.5	0.6	1.7	"	E-15
	46	"	"	1.7	1.0	0.3	0.7	"	
	47	"	"	0.9	1.1	0.3	0.5	"	I-15
	48	1号竪穴址	"	2.9	1.2	0.4	1.9	チャート	C-19
	49	遺構外	"	1.9	1.8	0.4	1.1	黒曜石	E-14
	50	"	"	0.9	1.6	0.2	0.7	チャート	表採

IV 調査のまとめ

姫宮遺跡は古くから知られ、縄文草創期から各期の土器片、石器類の出土も多く、平安期の遺物の多い所である。今回の発掘調査では、土器・石器の出土量が多い割に造構の発見が少なかつた。縄文時代前・後期にままある例ではあるが、時期不詳の竪穴址、新期の溝状造構と縄文時代早期の集石炉の検出に止っている。ところが、土器片の出土は夥しく、中でも縄文時代前期と後期のもののが多かった。前期のものはともかく、後期の土器片は上方からの流入とは考えられず、いくらかの塊土塊や、平状石の存在等から、縄文時代後期特有の造構の検出し難い生活面があつたと考えたい。竹内の報文にある集石炉は、掘り込み状態といい、雖の充満度、底部の敷石状配石といい形態は極めて整ったもので、明らかに火に合った跡が存在したり、疊間に炭化材が発見される事、等から飯伊地方で発見例の少ない集石炉の一つである。

調査区全域から収集された数多くの土器片は、第15図で見られるように、中央部から西側に帶状に陥没した黒褐色堆積層中に集中している。南側から中央部にかけて縄文時代後期、中央部から西側にかけて縄文時代前期の土器片が埠中する傾向が見られている。あえて言えば土器集中区で、必ずやこの近くに集落の存在が推量されよう。土器片について若干の考察を試みると、編年上極めて多彩で、縄文時代早期に比定される押型文土器から前・中・後期は勿論、条痕文を持つ晩期の土器まで出土し、さらに歴史時代の須恵器、灰釉陶器まで出土している。その中でもいくつかのピークがある。すなわち、第1は第9図5~31の土器が示す前期後葉、関東編年でいう諸磯B式、十三菩提式の時期である。第2のピークは、第10図33~53に示す中期末葉から後期の初頭、即ち加曾利E式終末期から称名寺式の時期である。この時期のものは、飯伊地方で今の所発見例が少ないので好資料と言えよう。第3のピークは第11図55~63等が示す後期中葉、堀之内式土器の仲間である。これら各期の土器片が、出土地点、土層等積極的に区域分類できない恨みはあるが、編年資料としての価値は高い。

次の特長としては、縄文式土器の中に関西系と考えられる土器があるということである。前期では、第9図5・8~9・28等があげられる。5・8・9は近畿地方の編年による北白川Ⅲ式、28は大歳山式、7は瀬戸内地方の里木I式類似のものと考えられる。後期のものでは、第11図の57があげられる。文様帶のあり方、区画の角ばった沈線等は、瀬戸内地方の中津式の影響を見たい。量は多くないにしても、前期・後期ともに関西系の影響を受けている例は、阿南地方から、飯田盆地の共通する特長であるが、周辺遺跡との対比研究を通して、下伊那地方における関西系土器の系譜検討の必要性を暗示している。

もう一つの特長は、縄文時代中期末葉頃下伊那郡下に特徴的に見られる文様のありかたである。第10図36は、沈線の縦の区画内に2つの結節をつけた縄文を縱走させたもので、神村透が飯田地方中期終末と指摘したものに属すると見たい。同図33~35もやはり縦の区画を残し、その内部に

杉葉状の1対の斜行沈線を施文してある。同図37~41は、後期的な文様が見られるなかに、依然として口縁部に横区画の文様を残し、沈線による波状壓垂文が施されている。この2群の文様構成は、中期終末と比定できる36から後期初頭へと続く変遷の中で、東海地方などから影響を受けた地方的な特徴そのものの例と考えたい。以上土器についての考察は、直井雅尚の考察に今村が多少手を加えたもので、若い他地域の考古学者の下伊那地方土器観の紹介も兼ねて載録したので批正を賜り度い。

周辺の環境でも触れた様に、姫宮遺跡は野底川上流、標高650mの位置にあり、上方の八王子堂ヶ入遺跡と共に山地帯の遺跡の一つである。遺物では縄文時代早・前期、後期や平安時代のものが多く、他地域の調査例は多くないが類似傾向が見られ、高位置における遺跡の実態を知る大きな手掛かりになったと言えよう。すなわち、縄文時代早・前期の遺跡は、概して山麓扇頂部や山間地域に多いのが下伊那地方の特色の一つである。西部山間地や上清内路上方、大平高原や風越山西麓地域と共に究明の端緒となったと言えよう。後期も同様の傾向を示しているが、周辺地域で言えば、飯田市大平八丁平、座光寺車止、等があげられる。共に山地帯の小耕地か林道開発によって発見されたものであるが、座光寺車止の場合は小河川沿いの山林中の小台地の発掘によって三か所ほどの所から相当量の加曾利B式土器片が採集されている。平安時代の高地小集落論は前々から問題になっていることであるが、新野・壳木に多いこと、古代東山道の通過地の阿智村智里園原・神坂山は別として、山本青木、伊賀良沢城湖、座光寺車止、高森町堂所、不動滝等々相当の山地帯に平安灰釉の出土が多く、順次その数が増している。とくに、渓谷沿いの山間の小台地で発見される例としてあげられるのは、座光寺車止、高森町不動滝であって、平安期の山間生活跡のあり方が暗示されている。今回の姫宮遺跡やその上方の八王子遺跡は前述の2遺跡に比べれば高地とは未だ言い難いけれども、森林関係の方々による奥地での小破片の発見の話、野底川右岸を辿ると相当奥に姫宮遺跡に類似したテラス状の地形が、何箇所が存在することから考えて、各期の高地性小集落の立地の可能性大と考えられる。今後に課せられた大きな課題と思われる。土地柄遺物発見が極めて困難な場所ではあるが、林道沿いの土層露出面、植林作業中の堀り上げ意図的な試掘調査等がなされるならば幸と思っている。ともあれ、今回の発掘調査の結果は、ひとり上郷町の山間遺跡の一端を知り得ただけでなく、飯伊地方の山地帯の遺跡のあり方に大きな示唆が与えられたと自負している。

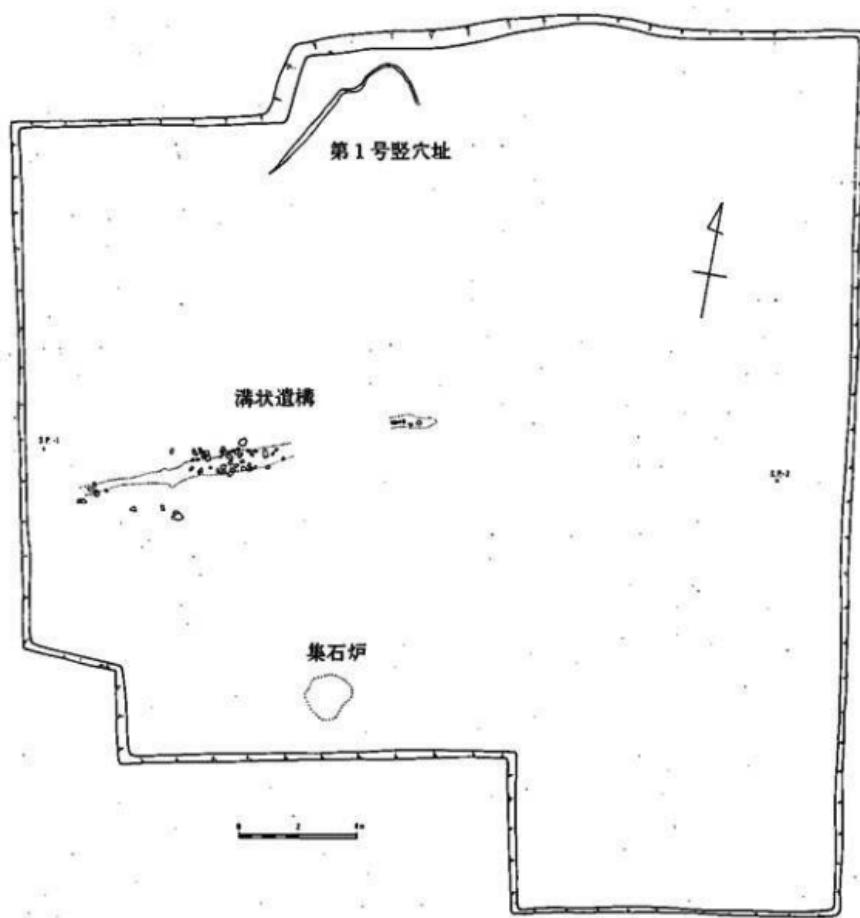
(今村)



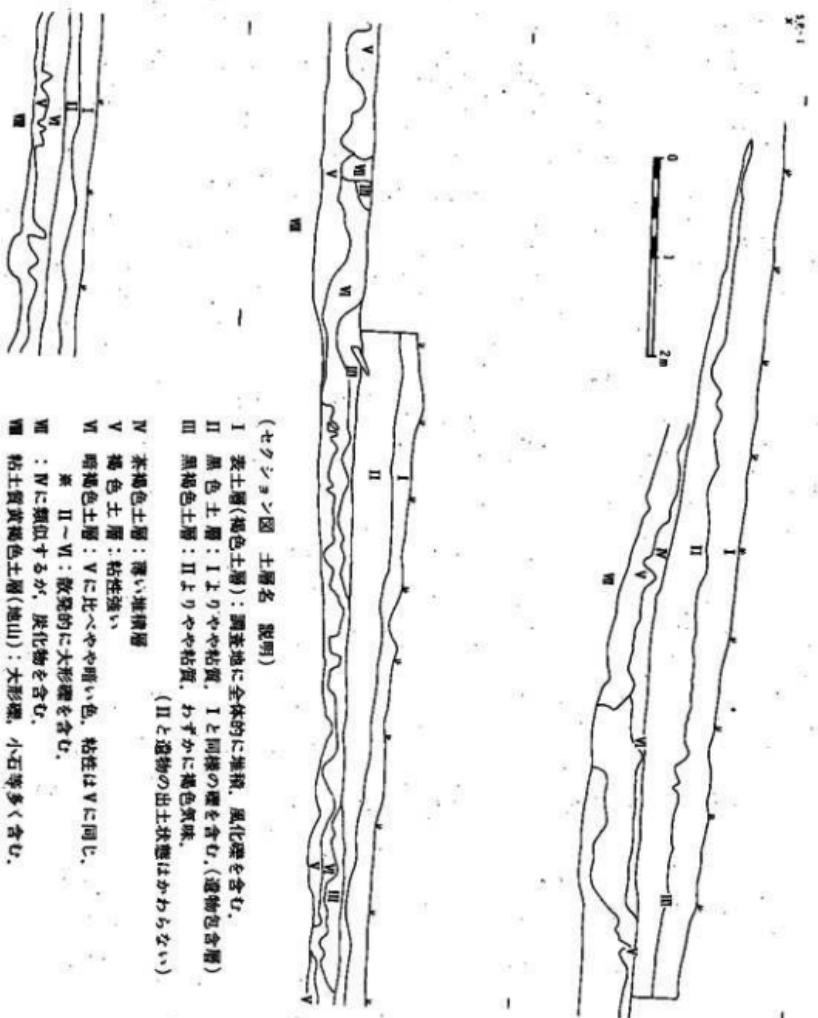
図版・写真図版



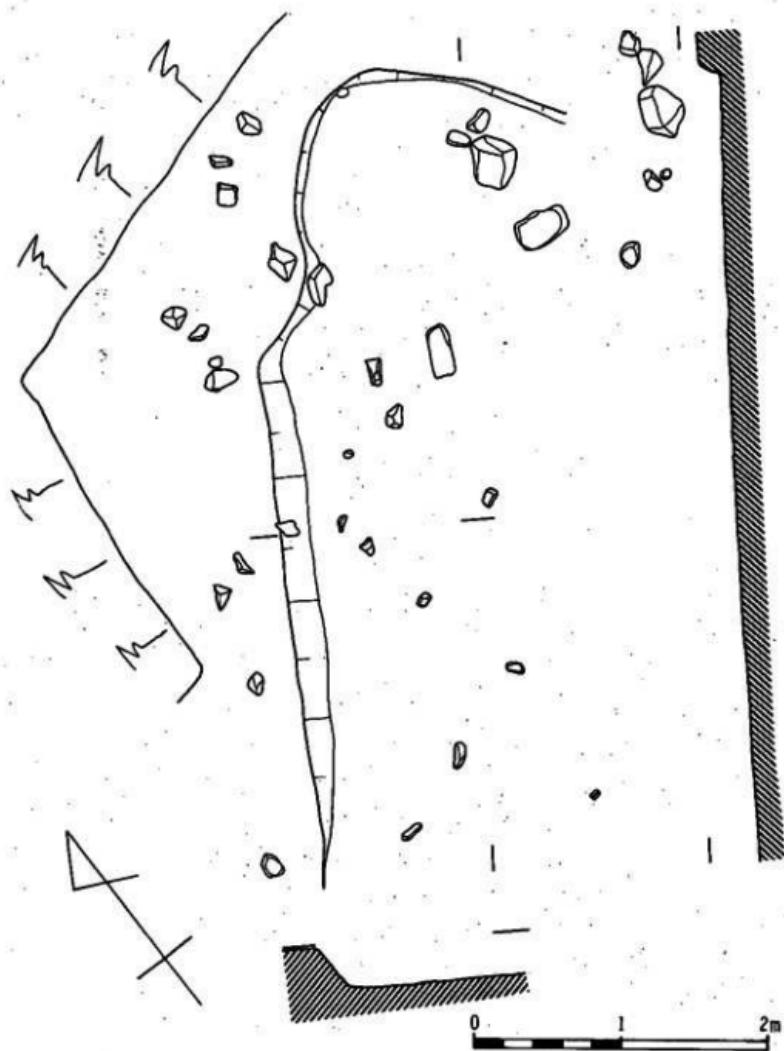
第1図 上郷町上段地区遺跡分布図 (1 : 20,000)



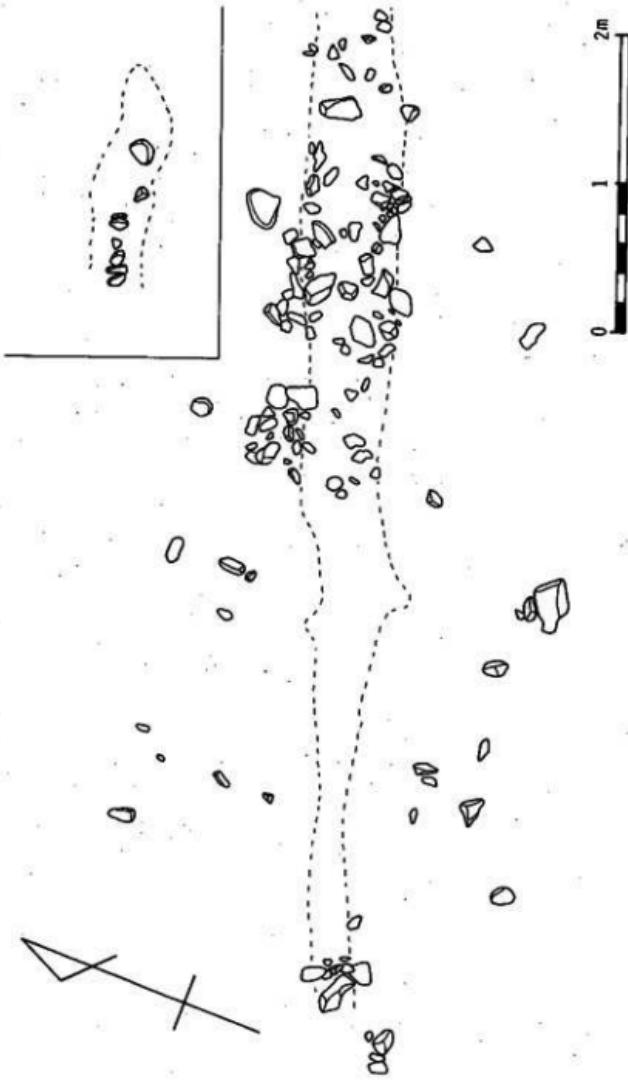
第2図 姫宮遺跡調査地内遺構分布図 (1:200)



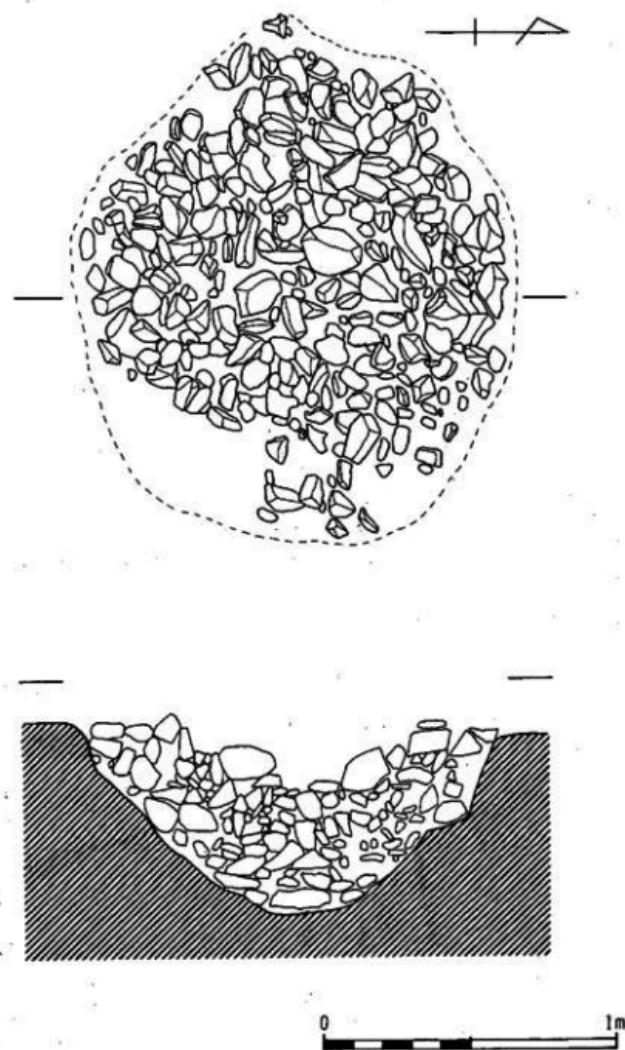
第3回 姫宮遺跡東西方向セクション図 (1:60)



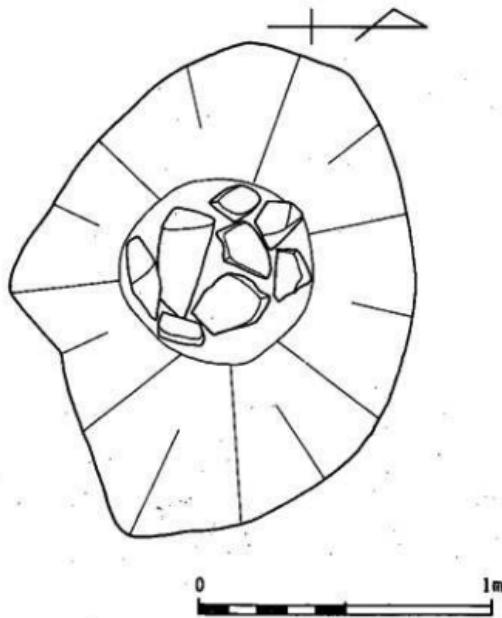
第4図 第1号墳穴址実測図 (1:40)



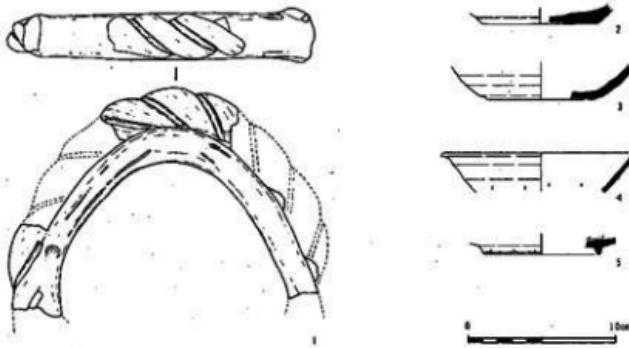
第5図 溝状造構実測図 (1:40)



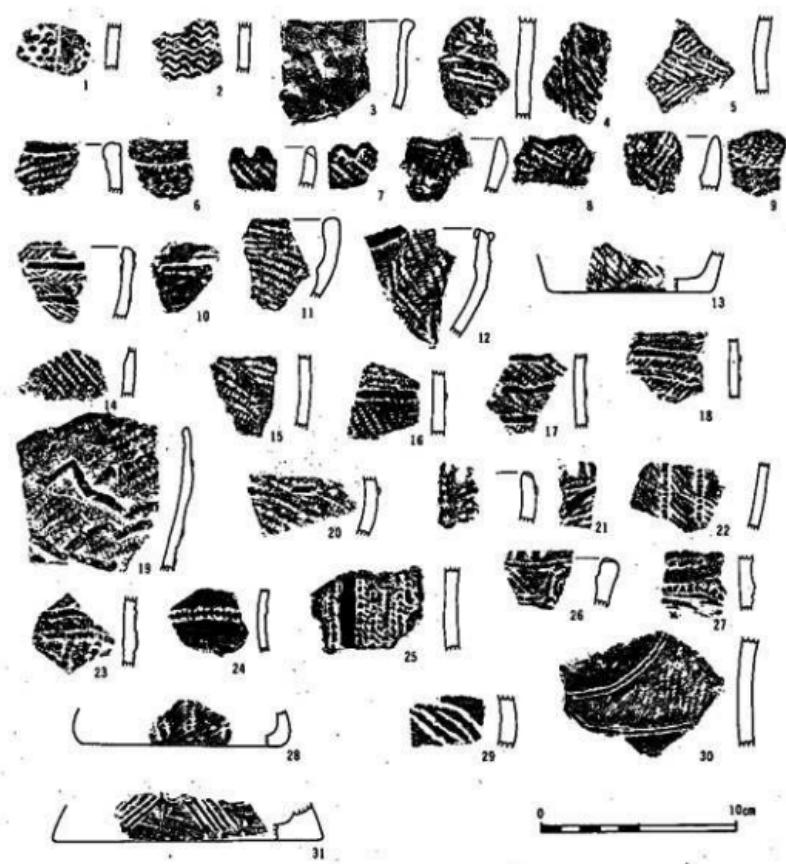
第6図 集石塚実測図(1)【検出面、断面】(1:20)



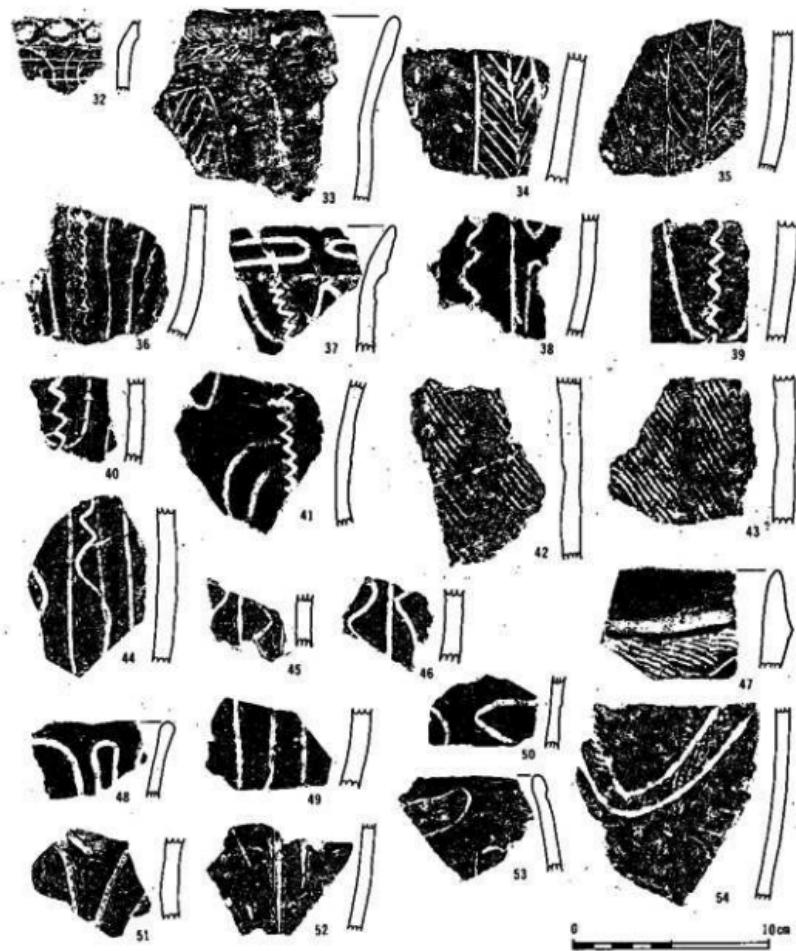
第7図 集石炉実測図(2)(底面) (1:20)



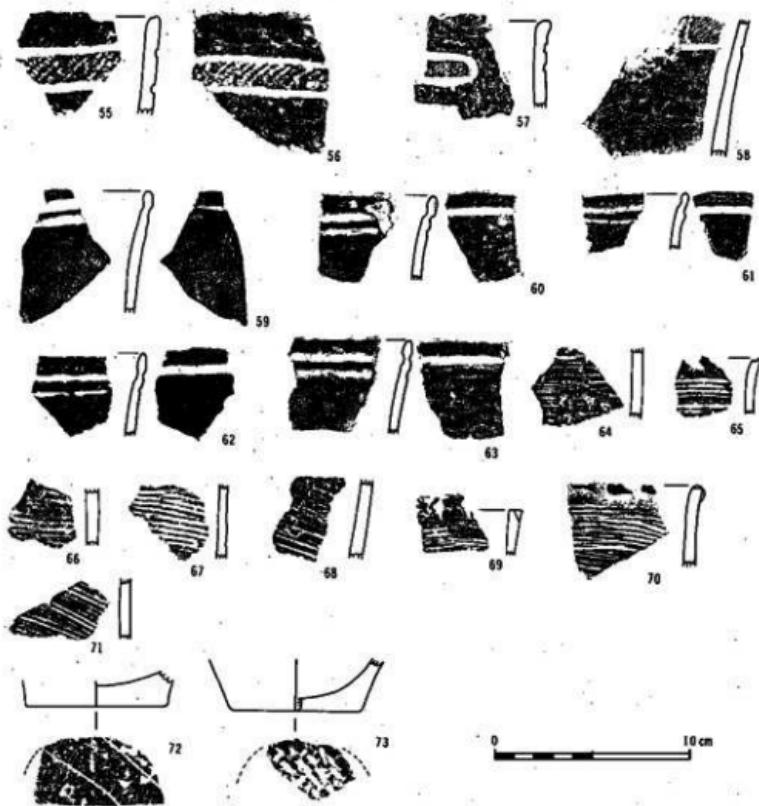
第8図 姫宮遺跡出土土器実測図 (1:4)



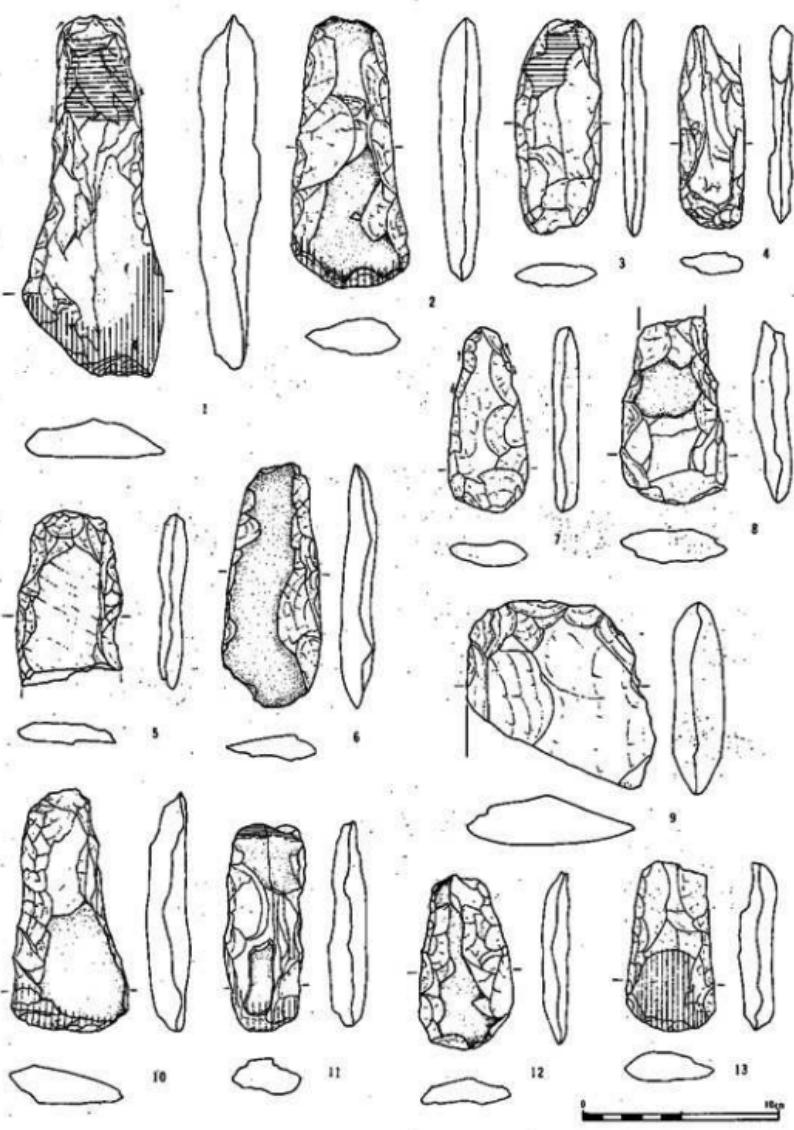
第9図 姫宮道路出土土器拓影(1) (1 : 3)



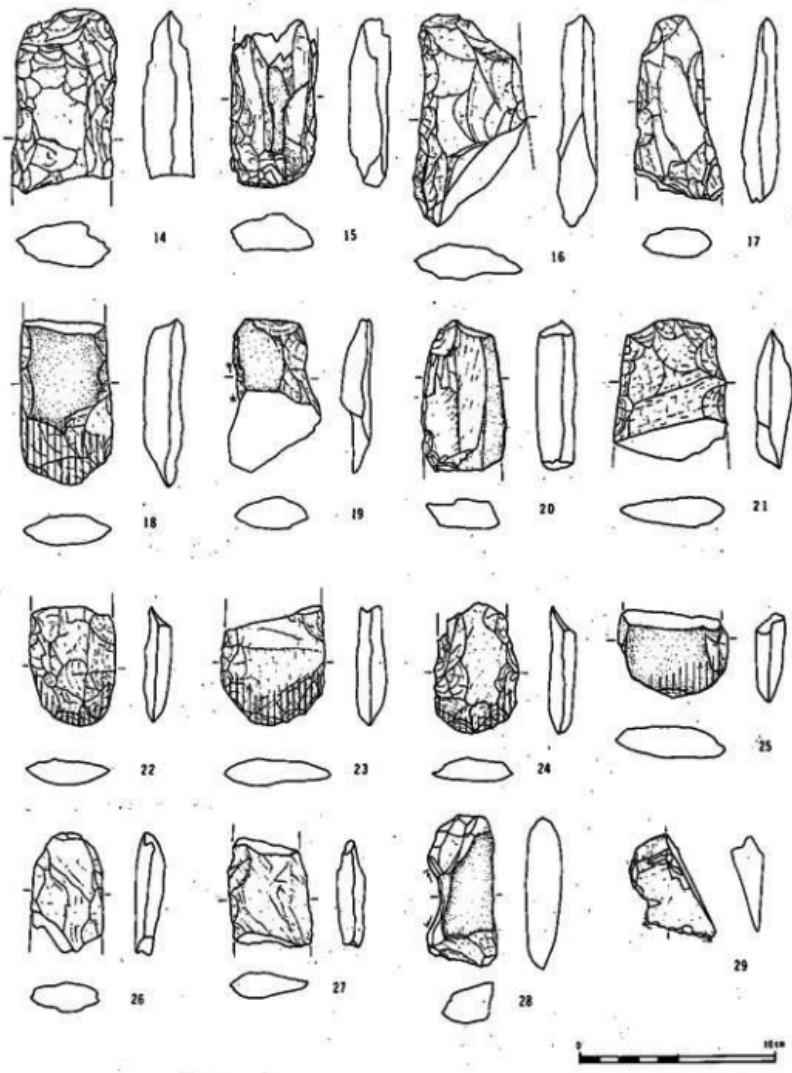
第10図 琼宮遺跡出土土器拓影図(2) (1 : 3)



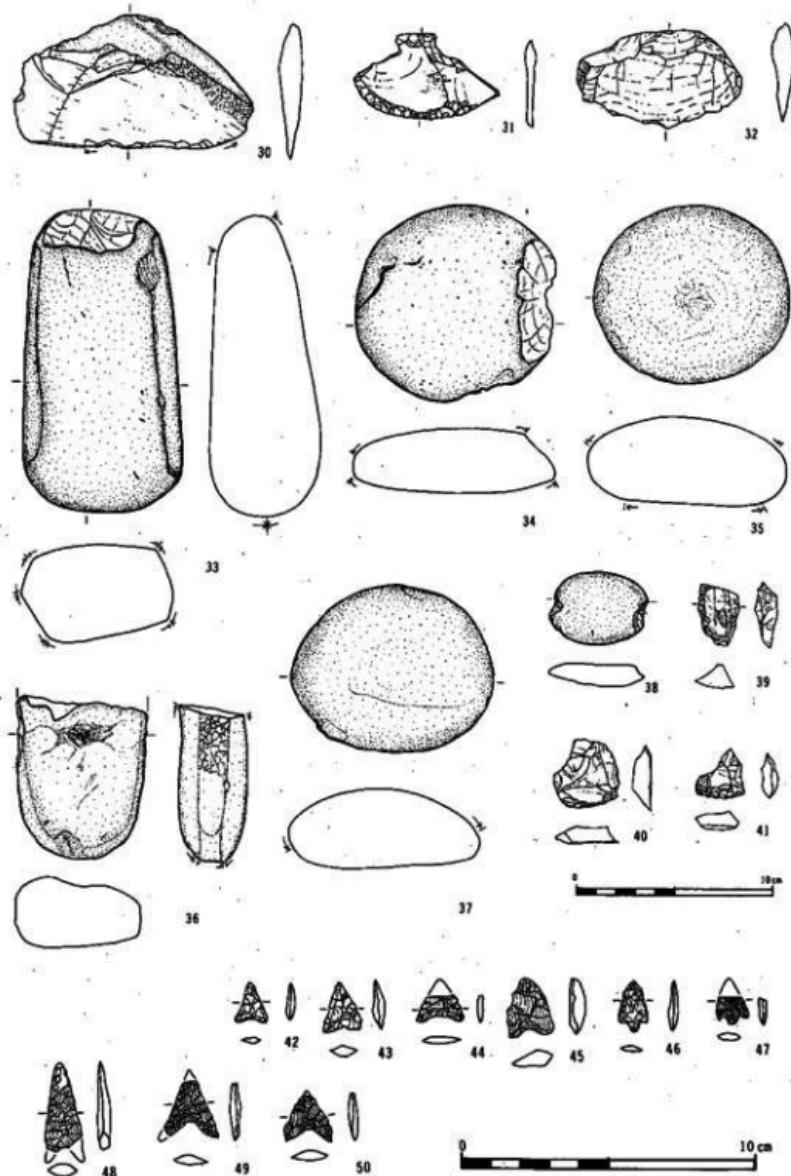
第11図 姫宮遺跡出土土器拓影図(3) (1 : 3)



第12図 姫宮遺跡出土石器実測図(1) (1 : 3)

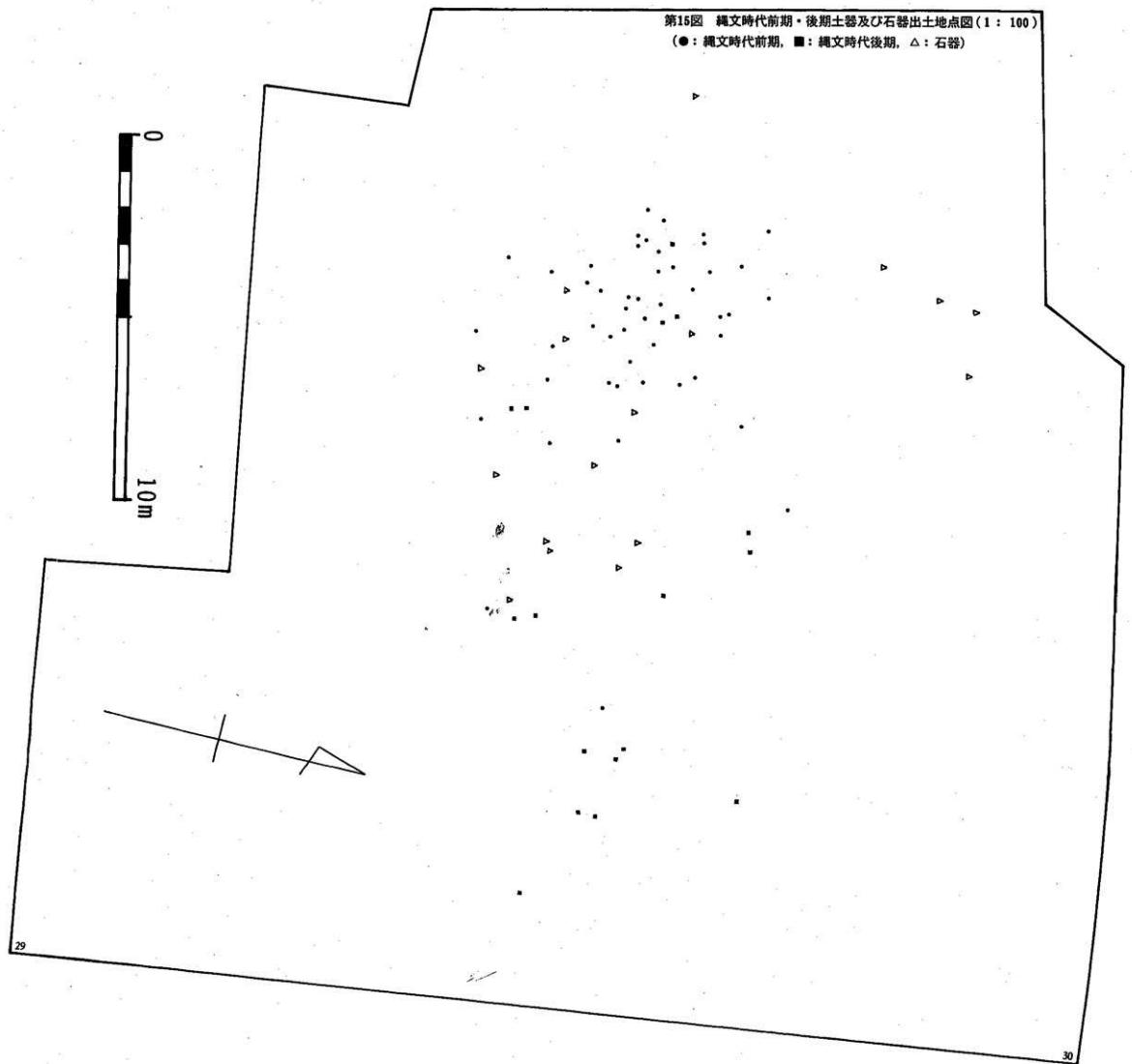


第13図 姫宮遺跡出土石器実測図(2) (1 : 3)



第14図 姫宮遺跡出土石器実測図(3) 30~41(1:3)・42~50(1:2)

第15図 繩文時代前期・後期土器及び石器出土地点図 (1 : 100)
(●: 繩文時代前期, ■: 繩文時代後期, △: 石器)





第1図版 姫宮遺跡調査地全景、第1号竪穴址、溝状遺構



1. 調査地全景（西方より）



2. 第1号住居址



3. 溝状遺跡

第2図版 集石炉断面・底面及び土器片出土状況



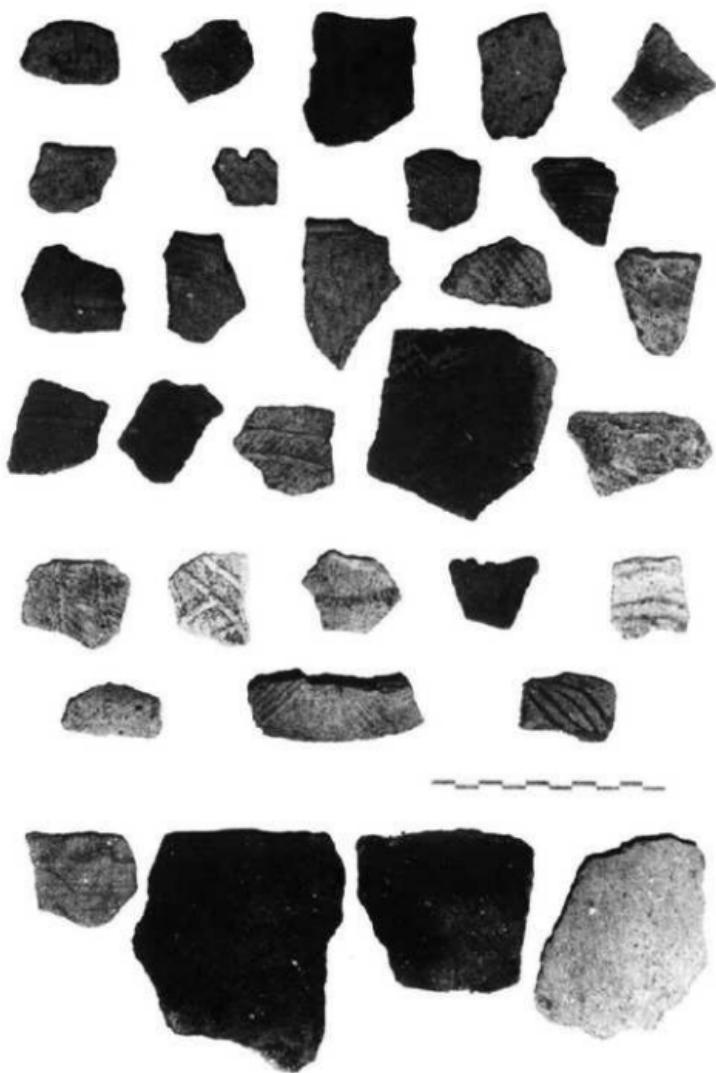
第3図版 姫宮遺跡調査地遠景、東西セクション、調査状況



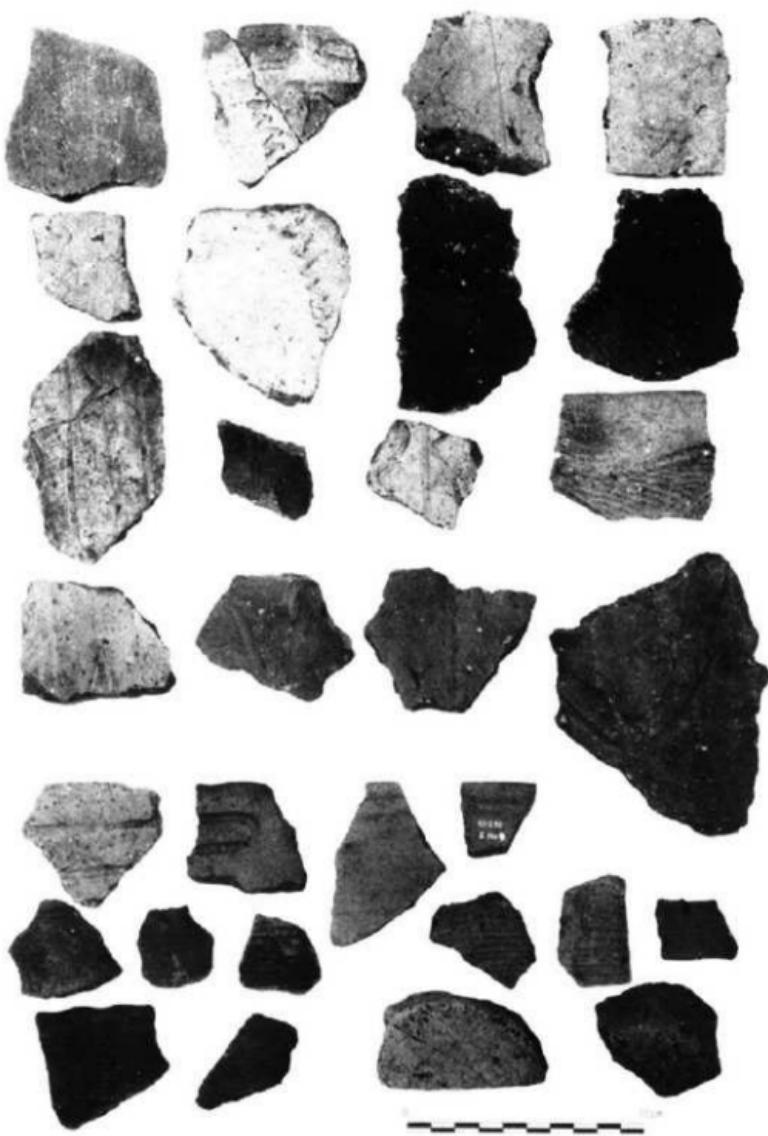
第4図版 姫宮遺跡出土土器(1)



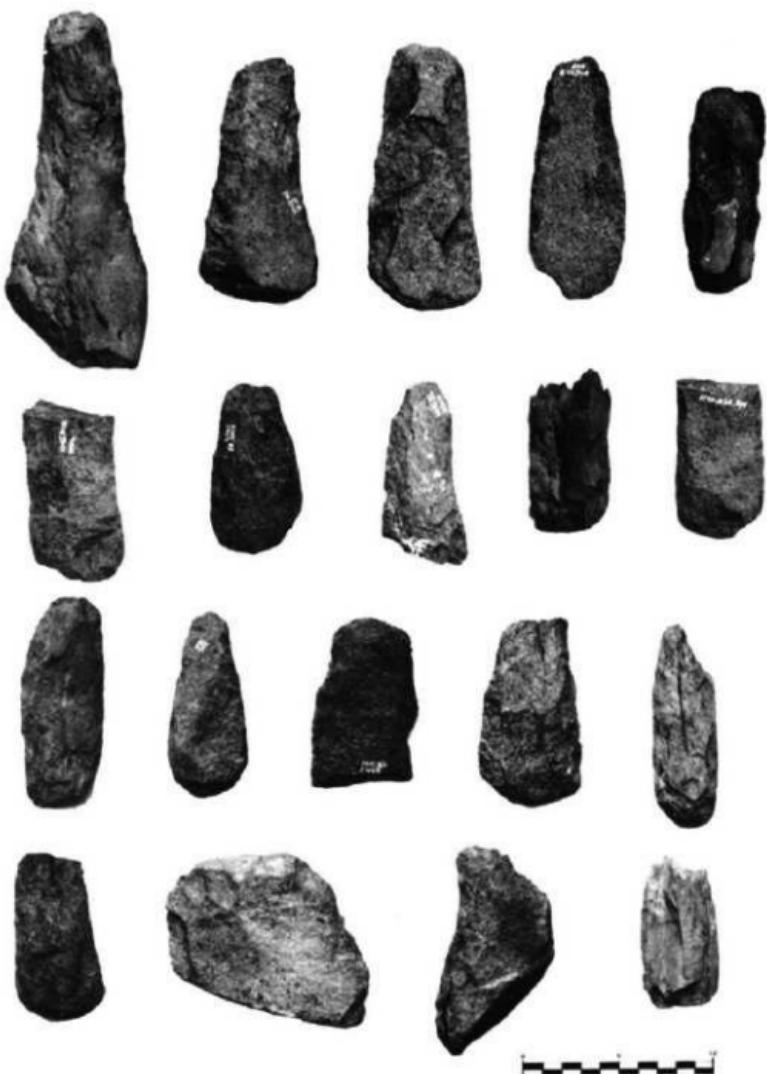
第5図版 姫宮遺跡出土土器(2)



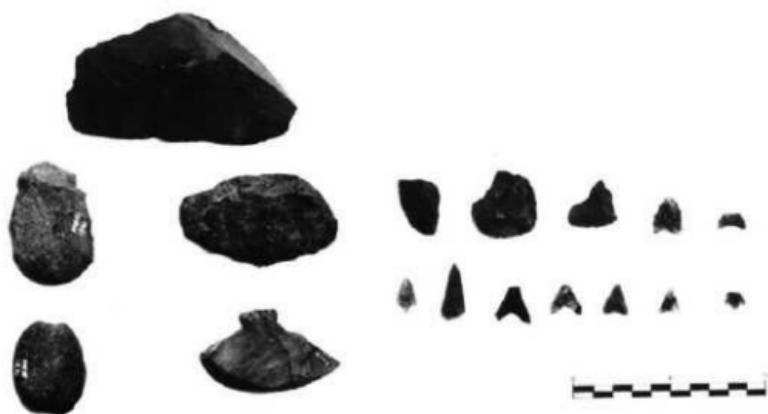
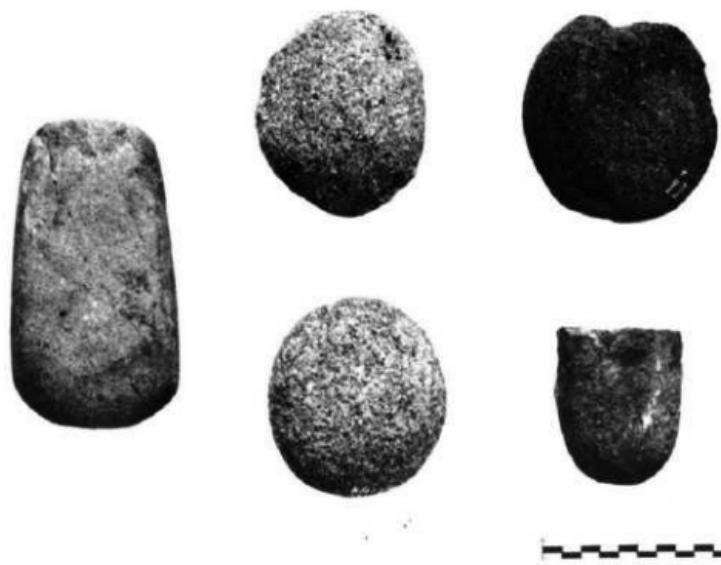
第6図版 姫宮遺跡出土土器(3)



第7図版 姫宮遺跡出土石器(1)



第8図版 姫宮遺跡出土石器(2)



姫宮遺跡

昭和57年2月1日

発行 長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印刷 株式会社 新葉社
飯田市常盤町商工会館内

